

私の出会った人々 (三)

安島 智子

◇対人恐怖的な症状に悩み、本当の自分を求めた青年期の女性◇

△対人関係場面の不安や緊張が動機となって来談された26歳の女性、摘子さん（仮名）のこと▽

―問題の提示・本当の自分を求めることを―

摘子さんとの最初の出会いは、その雰囲気の暗さと眼差しのきつさを印象的に感じた。何かつまらなさそうで、小さな花柄のワンピースという少女っぽい服装が、その雰囲気とアンバランスであったことも印象的であった。

本人が問題として語ったことは、「自分が出せない」、「出せば陰口を叩かれるのではないか」と不安になり、緊張するということであった。またミスが多く、「仕事がいまうできない」し、他人と比較すると特別おかしく感じているようであった。さらに、「人間としての自信がない」と語られた。この発言には問題の本質を感じ、

その理由を尋ねてみたところ、彼女は「自分らしく生きていけないからだと思う」と答えたのだった。そして「自分らしさを見つけていきたい」と語った。

摘子さんは26歳の電話交換手、高校卒業後山口から家族といっしょに上京して就職。中学生の頃から歌手志望で、その夢を捨てられずに歌謡学院に通っている。母親は養女にもらわれて育ち、父親はそこに婿養子に入った。本人も3歳の時、遠い親戚の家に養女に行き、6歳の時に戻っている。兄が一人、姉が三人でみな独身。本人は末子である。

三回目のセッションでは、21〜23歳の頃、「生きていてもしょうがない」と思っていたのに、チャー（ロック歌手）に会って「生きていてよかった」と思えたことが話された。また思春期には「いい子ちゃんて、親に反抗することもできなかった」し、ずっと「姉たちのいいようにされてきた」と悔しそうに話し、「自分の意志で自

分の人生を切り開きたい。とその気持を語った。この気持は四回にも引き継がれ、「花嫁になった夢を解消しなければ」と、半年前に見た夢の話をする。

夢…多分お見合いをしたのだろう。結婚式で白無垢を着ている。相手の人に対しては、好きとも何とも思っていないかった。結婚したくない人だったのに、断りきれずに、周りからいように言いくるめられて、いつのまにか結婚させられてしまう。

「これが私の一番の問題」、「目がさめて夢で本当によかった」と思った。そうならないように「自分をしっかり持っていかなければ」、「本当にやりたいことは何か」、「本当の自分はどうか」、「本当の自分の人生は」、「これは考えましたねー」

来談動機となった対人関係場面での緊張や不安状態と、「本当の自分は？」と投げかけてくる疑問は、まさに対人恐怖状態を語っているもので、彼女もやはり、「個の未確立のために漠然とした後めたさに振りまわされるままにとどまっている」一人であったものと思われ

る。成長のどのレベルでの障害が、この「遅ればせの思春期」の病をもたらしたかは人によって差異があり、体験してきた人生の違いがあるにしても、この後の摘子さんの仕事は、「関係の複数化の中での個の確立」ということになっていくであろうと想像された。

―「落ち込み」の時期―

この時期、本人の表現では落ち込むことが続いた。これは自分自身を改めて方向付けるための引き籠りにもなう抑うつ状態と捉えられ、また一体感を求める願いが表現された時期でもあった。

第五回では、「幸せだなあと感じるのは音楽と溶け合った時」と語られ、私には摘子さんにとって音楽は一体感をもたらすものとして理解された。第七回では、高校時代の友人で人に好かれる人の話をし、「人と結びつきたい」気持が語られた。音楽にもそれを求め、「自分と客席が一体になって溶けあい、心がひとつになったという感じが一番素晴らしい」と語り、音楽以外の時間は落

ち込んでいる時間が長いとのことであった。

しばらくこの状態が続き、「なにもしたくない」日や「涙が出て何も手につかない」日もあったが、その終り頃、電話セールスの友子さんを知り合うこととなった。何か大事な人が登場したと思われた。

―姉のこと・母のこと・自分のこと―

第九回で姉と旅行に行った先でのことが話された。姉は知らない人とも話ができるのに自分にはそれができず、その場では「いらぬ人間のように感じた」、「自分の感情を出さない体の仕組みができている」と絞り出すように話す。姉との旅行がきっかけになったのである。さらに「姉のお下がりが着て着められても、自分を誉められているのではない」と、『お下がりを着ていては、自分であるとは思えない』摘子さんの心情が語られた。

これらの話からこの家族の中の姉妹関係と摘子さんのおかれた立場、そしてその立場での摘子さんの気持ちが

私には痛いほど伝わってきた。

十一回には、三人でいると「二人が私より仲良くなつてしまうのではないか」という思いにいつもとりつかれてしまうと、三人場面での問題をとりあげたり、母親のことが初めて話された。

母親については、「あまり好きでない」と言いながら、また同時に「私は薄情だ。冷血人間で母のことをあまり思っていない」と母親に対する自分の気持ちを責めるかのように罪悪感に苦しむ姿も見せる。こういう気持ちが揺れ動きながらやはり、「母はわがままで折れることがない」、「父は養子で娘の私より力がないから、家の中では思い通りになると思っている」（母はまた、家の中では自由にふるまうが、外に出ると全く人間関係をつくれぬい）と、父親の弱さと母親の身勝手な言動に対する怒りの気持を現した。そして最後に「私は母親を本能的に許せない」と言ったのだった。

—自分について・母親の愛情—

十一回のセクションの後、摘子さんの捉える自分の見方が、ゆっくりではあるが変化が感じられるようになってきた。

十二回では、「自分は発展途上人だ」と語り、そういう自分を受け入れ、発展可能な自分を見ている余裕が感じられ、また「100%頑張ろうから80%頑張ろうに変わってきた」ということだった。

そのしばらく後には、「気のきいた会話をしたい」と思って沈黙が続いてしまう自分の状態を、「このコーヒーおいしいね」と何げなく言えない状態だと、自分の感じをつかんでいるなあと思われる発言がなされたり、「前はみんなといっしょじゃないと不安だった」から、「他の人と好みが違うのはへんじゃなか」と思っていたけれど、「自分のそういうところが好きになってきた」と話す。

みんなといっしょにいる場面でも、どこか自分らしくいることができてきたのだらう。

十五回には初めて、自分の好みの男性像を語った。こ

れまで父親や兄のことを話すこともなく、むろんボーイフレンドもいなかった摘子さんには画期的なことと思われた。また自分自身の理想像は、「大人のいい女」と語った。一方、電話セールの友子さんに対し、「友子さんは一個の人間として私を気にってくれた」と思えたとし、初めて人に「会いたい、友達になりたい」という気持ちで電話をかけることができたと言う。

摘子さんに大きなことが起きていることが察せられた。

同じ日である。大江千里が「幸せを感じる心が大切だ」と言っていたけれど、「あの一」とおずおずと話しはじめた。

家に帰った朝、寝ている私の耳元に、姉が母に言っている声が聞こえてきた。「摘子さん、もうそろそろ起こしたらいいんじゃない」と。それに対し、母は「摘子さんは夜勤しているんだから、ゆっくり寝かせてあげなさい」と言ってくれている。「その時初めてすごく母親の愛情を感じたんです」と、突然摘子さんの目に涙がこみ

上げてきた。「こういうことは今まででも何回もあったけれど、母親の愛情を感じたのは初めてなんです。」

大江千里ならずとも、「母親の愛情を感じる心が大切」と言いたい気がしてくる。彼女の「内なる母親」の変容が起きてきていることがまた同時に「内なる子ども」の変容が想像され、治療者である私との関係のありようも確認できた気がした。

溢れ出る涙に当惑しながら摘子さんは話し続けた。

「養女に貰われて行った自分が本当の自分と思っていたけれど、「あれは過去の自分」、「今の母親から育てられた今の自分」を認め、愛せるようになりたい。「母によって、現在の自分が認められ、本当の自分が見えた」ような感じがする。「母に愛されている」と泣きじやくり、「初めて母を愛していると思った」と涙が止まらない。

私は、ただただ「よかった」と思い、じーっとそばにいた。

—自分自身—

十七日には、「母に認められた自分を膨らませていく」ことが「自分を認められるようになっていく」ことだと思ふ。「自分がわかってくる」と、「人のことがわかってくる」のではないか、そうすると「自分は自分」と思ふと語る。

また友人とその妹の三人でスキーに行ったことが話され、その妹さんに「存在感がある、ゆったりしている」と言われたと嬉しそうに話す。

こう語る摘子さんに今まで感じられなかった摘子さん自身の存在の確かさのようなものを感じた。三人でいても自分一人が取り残されると言う不安もなくなったらしい。

会社での人間関係も改善されてきたことが推測され、面接の終わりをどうしていかを相談すると、「音楽が自分にとって何なのかを見極めないと自分が確立しないと思ふ、もう少しお付き合い下さい」と言う。

ここではっきりと、摘子さんにとってのテーマは自分

を確立するということとなったのである。

—私らしさの確立—

チャーの世界とブッダの世界を私の中に—

二十一回に、「ひとつでも昔と変わらないものを持ち続けたい」、「それはロックを聞いて感動できる心」だと思ふ。「真髓のところを信じられ、人間の醜い所を知っていつつ、きれいなところを見たいと思ふ」と語った後、「お釈迦様のようにになりたい」と言う。こんなことを余りにもすつと言ったのに驚き、「何故思ったの?」と尋ねたところ、手塚治虫の「ブッダ」を21歳の時に読んで感激したこと。特に印象に残っている人物は、「ナラダッタ(生物の命を粗末にしたため、獣の心まで身を落として罪をあがないつづけた人)とアッサジ(熱を出して一度死後の世界に行き、その後予知能力を持った鼻たれの子。最後に生きのまま飢えた狼の子に自分を食べさせた。)」と言うや、摘子さんの目から涙があふれ出た。

母親の話をした時にも涙を流したことを思い出した。

私もこの漫画は読んだことがあったので、あふれ出る涙をこらえようとしている摘子さんを前に言い様のない感動を覚えた。

今回は、「とことん駄目になってみたい」、「会社もやめて親からも見放され、フーテンにでもなっさまよってみたい」、「本当はこんない子ちゃんじゃない」、「もっと汚ない部分がある」、「いい子ちゃんじゃない自分を發揮したい」と語る。

語られた言葉では表現しきれないような事柄が、「ブッダ」の内容とどこか重なりながら、摘子さんの内的作業が進行しているように感じられた。

二十三回には、「私のアウトサイダー的な部分がチャートとかブッダということではないか」、「私のアウトサイダー的なところがアウトサイダーでなくなりつつある」、「私のアウトサイダー的なものを求めて行くと、私らしさを求めていくことになるのではないか」、「これだと言う芯みたくないものがつかめればいい」と言うのだ。

そうして次の回。「ブッダ」の世界は、「人間はなんのために生きていくのかと言う永遠のテーマの世界」だ。

「ブッダ」を読んで、「そこに私の元があった」、「父と母が勝手に私を生んだのではない」、「自分がどうして生まれたのか答えを見つけたかった」と語った。

摘子さんには両親を超えた宇宙の根元とつながる必要があったのであろう。音楽もしかり。まさに摘子さんにとっての芯は、この核心だったのかもしれない。こうして摘子さんの自己確立の仕事は進んでいった。

そして「自分をよく見つめ」、「自分を知り」、「やって行きたいことをやり続けて行く」と、「類は類を呼ぶ」から、「合う人と出会って結婚もできるんじゃないか」と言う。

これを聞いて、四回に「花嫁になった夢を解消しなければ」と語ったことを思い出した。それがなかったように思われる。

二十五回では、「自分は善人なんですよ。もちろん悪い面も持っているけれど」と両面を捉えた発言がなされ

たり、「私の暗い面は大人のいい女のイメージにしていきたい」と語るようになった。

そういえば、黒を基調としたコーディネートしたり、最近の摘子さんの雰囲気は大人の女性を意識しているようにも思われた。

会社では責任ある地位についたということで会社の対人関係場面での自分のありようを再び問題にし、「気になるのは、会社にいる時の私というのがある、本当の自分と違うような気がする」ということであった。私は「社会的な役割をとっている時の摘子さんは、自分の内面に向かっていく時の摘子さんと違って当然だし、役割に必要なあり方をしているのだと思う。それは大事なことでではないか」と話した。ここで摘子さんは社会的な場にいる自分のありようにひとつの納得をしたように私には思われた。

そして二十六回が最終回となった。「チャーを捨てられなかった自分がわかった」、「音楽を続けようと思いません。30歳過ぎてセミプロの音楽家になったら、『私はや

り続けた』と人に言えるでしょう」と語ったその態度は、きっぱりとしていた。

あれから二年あまりたったつい最近、彼女の歌がある小さなコンサートで聞くこととなった。客席の手拍子が私の耳にはやけに大きく聞こえた。後ろのバンドもなかなかだった。彼女は客席と一体となって歌いあげていた。スポットライトがあたってくっきりと浮かびあがった、ソバージュヘアに黒のスーツ姿の摘子さんの姿が鮮かに蘇る。

(このはな児童学研究所)